phrase

フレーズ

［フレーズ］東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 広報誌　［phrase］vol.02/2014.10 Issue/Tohoku Medical Megabank Organization　vol.02

［特集］

対話

—— 今、そしてこれから、もっとも大切なもの

被災地。それぞれの対話

ToMMo —— 信頼を創り出す試み

対話のphrase

［連載］あなたのDNAはどこへ行く

［副機構長に訊く］末永く支援を続けるということ

Tohoku Medical Megabank Organization

知ることはできないと君が言ったとき、
どのような種類の不可能性のことを言っていたのか。

［ルードヴィヒ・ウィトゲンシュタイン］

▶Staff
Editor in Chief: 清水 修［ToMMo　特任准教授］
Editor: 戸田聡一郎［ToMMo　助教］
Writers: 清水 修［ToMMo　特任准教授］
戸田聡一郎［ToMMo　助教］(17p)
Art Director & Designer: 古田雅美［opportune design］
Photographers: 森 栄喜(cover, 02-03p, 12-13p)
千葉健一
Illustrator: 本多志帆(22p)

▶Publisher
東北大学 東北メディカル・メガバンク機構
〒980-8573 仙台市青葉区星陵町2-1/Tel. 022-717-8078
http://www.megabank.tohoku.ac.jp

発行日: 2014.10.31
印刷・製本: 今野印刷株式会社
©Tohoku Medical Megabank Organization
Printed in Japan

phrase

フレーズ

［フレーズ］東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 広報誌　［phrase］vol.02/2014.10 Issue/Tohoku Medical Megabank Organization　vol.02

contents

［特集］対話── 今、そしてこれから、もっとも大切なもの
被災地。それぞれの対話 …… 04
ToMMo── 信頼を創り出す試み …… 14

対話のphrase …… 07, 21

［連載］あなたのDNAはどこへ行く …… 22

［副機構長に訊く］末永く支援を続けるということ …… 24

▶取材協力
庄子隆弘
庄子智香子
宍戸正幸
樋口敏雄
樋口恵
元・仙台荒浜地区住民の皆さん(対話のフレーズ)
仙台荒井小学校用地仮設住宅の皆さん(対話のフレーズ)
地域支援岩沼センターの皆さん(対話のフレーズ)

▶協力
スズキ記念病院(岩沼市)

▶執筆［ToMMo］
長神風二／広報戦略室長(連載)

▶談話［ToMMo］
工藤古都美／メンタルヘルスケア推進室
近藤敬一／ToMMoクリニカル・フェロー
黒羽正剛／ToMMoクリニカル・フェロー
草野久子／ToMMo GMRC
目時弘仁／地域医療支援部門 講師
八重樫伸生／副機構長

［先人のフレーズ・出典］
ルードヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『青色本』大森荘蔵 訳
ターシャ・テューダー『思うとおりに歩めばいいのよ』食野雅子 訳
チェスワフ・ミウォシュ『チャスワフ・ミウォシュ詩集』関口時正・沼野充義 編(久山宏一 訳)

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構
［ToMMo］

東北大学 東北メディカル・メガバンク機構(略称:ToMMo)は「震災復興に取り組みながら未来型医療を築く」という目的のもと、東北大学に設置された組織です。具体的な取り組みとしては、沿岸被災地に医師を派遣する「地域医療支援」、被災地住民の健康を長期にわたって見守る「長期健康調査(ゲノムコホート調査)」、カルテの電子化を推進する「医療情報ICT化」、宮城・岩手両県15万人の生体試料・健康情報・遺伝情報を保存する「ゲノムバイオバンク構築」、遺伝情報に基づく未来型医療を担う人々を育成する「人材育成」を挙げることができます。ToMMoは、被災地に寄り添い、住民の健康を見守りながら、東北にゲノム医療研究拠点を築き、被災地を含む「東北の自立」を目指す組織です。

対話

今、そしてこれから、もっとも大切なもの

東日本大震災から3年半。
着々と進む復興とともに、被災地の人々は日常を取り戻し始めています。
そんな今、心の復興を支えるものは「対話」。
ていねいな対話とそれによる「つながり」こそが、今、そしてこれから、もっとも大切なものとなります。
そこで、今回の特集では、被災地での人々の対話、
東北メディカル・メガバンク機構（ToMMo）と地域の方々との対話に焦点をあてたいと思います。
日々、心を重ね合わせていくことで、
東北の未来を担うコミュニティは確実に創られていくのです。

［対話のフレーズ］
常に被災地とともに歩み続けるToMMoは、健康調査という「住民の皆さんとの対話」をもとに、この地に資する未来の医療を構築したいと考えています。そこで、今号では、被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに「対話する時に相手に話しかけたい言葉」、「対話する時に一番大切なこと」、「対話に関して思うこと」などを綴ってくださいとお願いして、実際に「対話のphrase」を手書きしていただきました。

text by Osamu Shimizu / photograph by Eiki Mori

INTERVIEW

荒浜——遥かなる故郷の光景。

津波によって跡形もなく消え去ってしまった町、仙台・荒浜。
かつて、ここには、脈々と受け継がれてきた豊かな文化とコミュニティがありました。
そんな、目には見えない「宝」を絶やさぬために、
荒浜の人々は今、未来につながる対話を始めています。

庄子智香子

元・仙台荒浜地区住民
荒浜再生を願う会

庄子隆弘

元・仙台荒浜地区住民

荒浜・深沼海岸は仙台で唯一の海水浴場でした。あの日から……3年前の3月11日からはまったく人が来ない場所になってしまったけれど……10年20年経てば、きっとまた、多くの人々が集まる賑やかな海水浴場に戻っていると私は信じています。

数分の差で津波から逃れる

あの日は午前中に母を病院に連れて行きました。病院から戻ってきて一緒にお昼を食べてから、TSUTAYAにCDを借りに行ったんです。目当てのCDを見つけて、手に取った瞬間に激しい揺れが襲ってきて……。ようやく揺れがおさまると、母が地震で怪我でもしているんじゃないかと心配になり、とりあえず、車で家に向かいました。荒浜に向かう途中、カーラジオでは「大きな津波が来ます」と言っていました。でも信じられませんでした。荒浜では「地震はきても津波は来ない」とずっと言い伝えられていたからです。

家に到着すると、ちょうど母が知り合いの車に乗り込もうとしているところでした。「迎えに来たよ。こっちに乗って!」と声をかけて母を自分の車に乗せ、海と反対の方向に走り始めました。七郷中学校の前に来ると、「津波が来ているから、校舎に入ってください」と止められました。校庭に車を置き、校舎に入ると「上に上がってください! 津波が来るので4階まで上がってください!」と誰かが叫んでいました。

車の中で過ごした震災の夜

震災当日からそのまま、七郷中学校は避難所となりました。避難してきた人々は体育館と武道館に分かれたんですが、私と母は武道館のほうに入りました。後から分かったことですが、夕方、息子(隆弘さん)が七郷中学校に私たちを捜しに来たらしいんです。でも武道館のほうも避難所になっていることに気づかずに、体育館だけ探して「いない」と思って親戚の家に行ったそうです。

あの日はとても寒い日だったんですよね。武道館には暖房もなく、上に着るものも持たずに出てきてしまったので、中学生の柔道着を借りて、何枚も重ね着して寒さをしのぎました。夜になると、それでも寒くて耐えられなくなってきたので、七郷中学校から500mほどのところにある親戚の家に毛布を借りに行きました。親戚の家に着くと、地震で家の中がかなり荒れたらしく、みなさん、車の中で寝ていました。「毛布を持って行くよりも、お母さんもこっちに呼んで、もう一台の車の中で寝たら?」と言ってくれたので、七郷中学校まで母を迎えに戻りました。結局、その日は車の中で一夜

を過ごしました。

翌朝、別の親戚の家に行って主人と再会し、そのまま利府町の、私の姉の家に向かいました。利府に着くと、こたつで息子が寝ていました。目を覚ました息子は私たちがいることに驚いて「夢の中で『葬式をやらなくちゃ』と思っていたんだ」と言っていましたね。

仮設住宅は大切なコミュニティ

私は荒浜で生まれ育ち、ずっと住み続けてきました。津波が来た時点で、荒浜の集落は730世帯3400人くらいの方々が住んでいたはずです。とても古い集落で、おそらく500年くらいの歴史があると思います。20代以上続く家が多かったですからね。同じ集落の中に ▶

庄子隆弘

僕の家は海のすぐそばなんです。いや、だったんですというべきかな。道路一本隔ててもう海なんですよ。津波で流されたんですが……今でも、その実感がまったくないんです。

母と祖母を探し続けたあの日

東日本大震災の時は東北学院大学泉キャンパス図書館にいました。あの日は館内整理の日でした。揺れた瞬間は事務室でデスクワークをしていたんですが、幸い、崩れる本に埋もれることもなく無事でした。スタッフを帰宅させ、現場責任者としてしばらく大学に残った後、バイクで荒浜の家に向かいました。すると、七郷中学校のあたりで警察に停められて「津波が来たので、ここから先にはいけませんよ」と言われました。この時、初めて、とんでもないことが起こったのだと気がついたんです。

家には母(智香子さん)と祖母がいるはずでした。たぶん、津波から逃げられただろうという楽観的予測のもと、七郷中学校体育館の避難所で二人を探しました。でも、いませんでした。「もう、だめかな」と思いましたね。その後は利府の親戚の家に行って、家族や親族からの連絡を待ちながら、こたつで寝てしまいました。夢の中で「家族の葬式をやらなきゃな」とぼんやり考えていた記憶があります。そして翌朝、目がさめると、両親と祖母が利府の親戚の家に来ていました。みんな、無事だったんです。

跡形もなく消え去った荒浜の町

震災の1週間後、荒浜の家を見に行きました。実は、この日に見に行くまでは、廃墟のような町が残っているんだろうと思っていました。が、被災後の荒浜を目にした瞬間、その考えは一蹴されました。イメージしていたこととすべてが違っている。目の前には何もない荒涼とした光景が広がっていました。町が跡形もなく消え去ってしまったので、実感が湧かない。この時のショックがずっと心の中に残っているので未だに実感が湧かないんだと思います。

震災後は2ヶ月間、利府の親戚の家に住まわせてもらい、5月末に荒井小学校用地仮設住宅に家族4人で入居しました。一方、職場である図書館のほうは復旧が大変でした。すべての復旧が終わったのは9月。半年も図書館の復旧作業をしていたことになります。その間、全国の図書館関係者の方々から温かいご支援をいただきました。図書館の世界というのは横のつながりがとても強いんです。茨城県結城市「ゆうき図書館」の笹沼崇副館長(当時)、大阪市「エル・ライブラリー(大阪産業労働資料館)」の谷合佳代子館長は、どちらもメーリングリストやtwitterだけのお付き →

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

▶ 本家別家（本家と分家）がいて、契約講などの「講」がたくさんありました。ここでいう「講」とは相互扶助的なグループのこと。契約講は、冠婚葬祭の際にお互いに助け合う講ですね。お葬式のお手伝いなどするわけです。ずっと昔から続いて来たんだと思います。

そんな古い集落の中で、庄子家は4代前にこの土地に来た家なので、「他所（たしょ）から来た家」と言われ、馴染むまでは大変だったという話を祖父から聞いたことがあります。私の祖父は漁師をしていましたが、当時、集落全体では半農半漁の家が多かったです。現在では、漁業をやっている家は数えるほどしかいません。5、6軒じゃないでしょうか。うちも、主人はフランス料理のシェフで息子は会社員。震災前、私は母の世話をしながら週に2回、事務仕事のパートをやっていました。

震災後、利府の姉の家などのお世話になった後、5月末に荒井小学校用地仮設住宅に家族4人で入居しました。入居の時はけっこう大変でした。10世帯集まらないと入居申込ができないシステムになっていて。避難所に行って知り合いのところを回って、なんとか10世帯集まって、やっと申し込んだんです。

ここでは高齢者のひとり住まいがけっこう多いんですよ。20世帯くらいでしょうか。その方々のご家族は大体、借り上げ仮設のアパートに入居されています。ご家族の中のおじいちゃんやおばあちゃんだけ、借り上げアパートから離れてこの仮設住宅に住んでいます。たぶん、高齢者の方々にとっても、そのほうが良かったのだろうと思います。借り上げアパートでは昼間、家族が働きに出るので、おじいちゃんやおばあちゃんはひとりで留守番することになります。でも、ここに住んでいれば、周りに昔からの知り合いがたくさんいるし、集会所に行けばみんな集まっているので寂しくないわけですね。今年の春、20組ほどの方々が仮設住宅から仙台市の復興公営住宅に移られました。その中に、ひとり暮しの高齢者もおられたんですが、昼間はシルバーカーを押して、この仮設住宅にいらっしゃいます。毎朝8時に自転車でいらっしゃる元気な方もおられますよ。被災した高齢者にとって仮設住宅が「対話」の場、欠かせないコミュニケーションの場になっているんです。

対話から始まる荒浜の再生

震災前はね、荒浜ってとても賑やかで活気のあるところだったんですよ。漁業の方々が毎年、神社のお祭りを催して盛り上がっていたし、学区民運動会も盛んでした。もちろん、夏になれば海水浴客がたくさん訪れていました。そんな荒浜から人がいなくなって廃墟のようになってしまうなんて、私には耐えられない……息子も話していたかもしれませんが、すでに荒浜は災害危険区域（居住禁止区域）

に指定されて、人が住めない場所になってしまいました。でも、私は荒浜に戻りたい。けっして、移転する決意をされた方々を非難しているわけではありません。ただ、「荒浜に戻って、住みたい」と思う人間もいるんだということを知っていただきたいのです。そして、少なくとも、住んでいた人々の跡を何らかの形で残したいと思っています。荒浜には、土地に根づいた、かけがえのないコミュニティがあったのですから。

［2014年6月17日。仙台・荒井小学校用地仮設住宅集会所にて］

庄子智香子：仙台・荒井小学校用地仮設住宅住民。仙台・荒浜で生まれ育ち、震災発生時まで荒浜に居住。震災後3年間の仮設住宅生活を過ごし、現在に至る。「荒浜再生を願う会」に参加し、故郷に戻るべく、各方面との対話を続けている。

INTERVIEW

→ 合いでお会いしたことはなかったんですが、仙台にいらっしゃって図書館の復旧を手伝ってくださいました。

土地に根づいて生きるということ

仙台という都市の近郊で育っていながらこんなことを言うのもなんですが、僕はとても「土着的な考え方」をする人間なんだと思っています。荒浜という土地から離れることに強烈な違和感を感じるんです。震災後、荒浜地区は災害危険区域（居住禁止区域）に指定され、住めなくなってしまいました。かつての荒浜地区居住者のうち、多くの方々はその指定に異議を唱えてはいません。荒浜に戻りたい人々は少数派なんですね。でも僕は、住めるならば、また、荒浜に住みたい。少なくとも、かつて荒浜に根づいていた文化を残していきたいという思いがあります。

思えば、震災後には実に様々な、そして自発的な「復興のための集まり」がありました。そういう場には、ボランティアのファシリテーターと呼ばれる方々がいらっしゃいました。その方々は「議論百出する住民の話し合いの場を上手にまとめ、各意見のポイントを整理して住民に返す」ということをしてくれていました。いわば、情報の交通整理です。あの方々の仕事をそばで見ていて、情報のやり取りと整理によってコミュニケーションが深化していくことを実感して、「自分も情報を正しく扱える人間になりたい」と思いましたね……震災直後の経験でも「情報が人を救う」場面を目の当たりにしてきましたし、今になってみれば、僕が震災からもっとも学んだことは「情報とコミュニケーションの大切さ」に尽きると思います。

情報の先には必ず「人」がいる。

荒浜のコミュニティを、そして、文化を残していくことは、その先にいる「人」を大切にすることに他ならないと日々、痛感しています。

［2014年5月27日。東北大学医学部1号館3階リフレッシュルームにて］

庄子隆弘：仙台市内の大学図書館の仕事をしている。仙台・荒浜で生まれ育ち、震災発生時まで荒浜に居住。震災後は荒井小学校用地仮設住宅より通勤。2012年には『図書館体操』を考案し注目を浴びる。現在、荒浜に『海辺の図書館』を設置するべく活動中。

対話のphrase

被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに、「対話する時に相手に話しかけたい言葉」、「対話する時に一番大切なこと」、「対話に関して思うこと」などを綴ってくださいとお願いして、実際に「対話のphrase」を手書きしていただきました。

それから近道を探そうとしないこと。
価値ある良いことはみんな、時間も手間もかかるものです。

［ターシャ・テューダー］

一期一会

及川広美さん
彪雅ちゃん、涼雅ちゃん
（仙台・借り上げ仮設住宅住民）

震災後、結婚・出産しました。対話は「人との出会い」から始まるのだと思っています。

佐藤玲子さん
（ToMMo GMRC スズキ記念病院駐在）

我が家は4世代家族。そんな家族と暮らす私にとって、世代を越えた普段の会話が「宝物」なんです。

私の宝もの

自然との対話

貴田国松さん
（エコピア仙台 代表）

震災復興のためににんにくを有機栽培しています。自然と対話し、人と対話していきたい。

親子の対話
一番大切

貴田喜一さん
（荒浜再生を願う会 代表）

大津波で家を流され、現在は仙台市内の荒井仮設住宅に住んでいます。流されたとはいえ、仙台荒浜は大事な故郷。その故郷が今、消えかかっているため、「荒浜再生を願う会」を結成しました。震災後3年を経て、今、思うことは「もっとも難しい問題は『家庭』の中にある」ということ。今後の生活の問題において、どの家でも家族内での合意形成がなされていない印象がありますね。

小笠原香織さん
（ToMMo GMRC スズキ記念病院駐在）

対話によって満面の笑みがお互い生み出される…。そんな思いでこの言葉を書きました。

満面の笑顔

ありがとうをいっぱいに

大久並子さん
（ToMMo GMRC スズキ記念病院駐在）

いつも、誰にでも、「ありがとう」をいっぱいに、感謝を込めて話しかけたいと思っています。

丹野礼子さん
（仙台・荒井小学校用地仮設住宅住民）

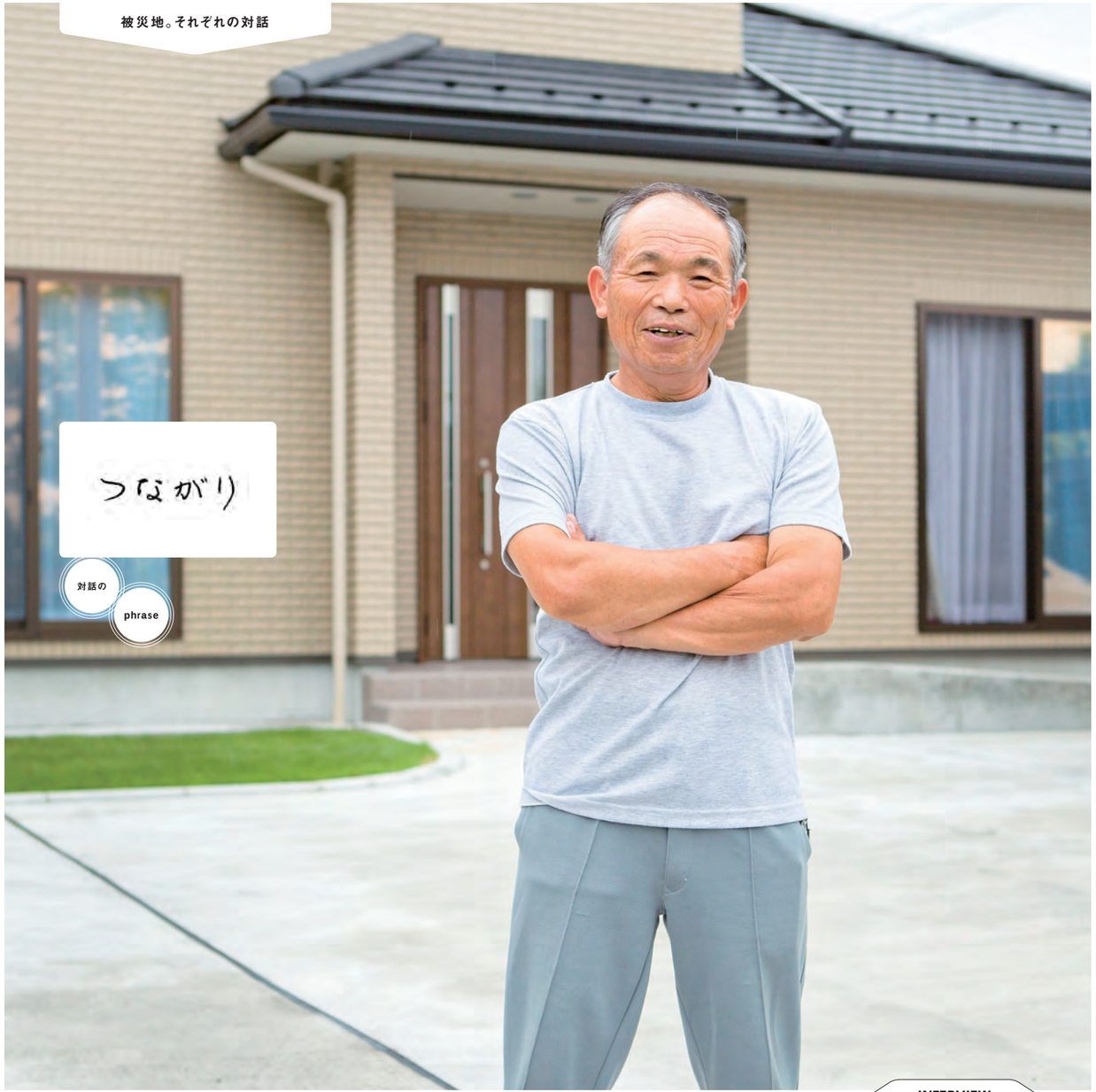
仮設住宅生活も3年。元々、橋本病でしたが、震災後はホルモン剤投与の頻度が上がり、辛い状態です。

感謝と笑顔

こんにちは

松本祐子さん
ひなのちゃん
（仙台・借り上げ仮設住宅住民）

職場で接客中に被災。顧客の誘導が大変でした。その後、結婚・出産し、借り上げ仮設に住んでいます。



つながり

対話の phrase

INTERVIEW

宍戸正幸

みやぎ農業振興公社 職員

そして、新たな「人生」への挑戦を。

津波による「過酷な非日常」に置かれた人々にとって、
この3年半は日常を取り戻す戦いでした。
その時間をともに過ごした人々の間には堅い結びつきが生まれました。
しかし、人はやがて、それぞれの道を歩み始めます。
「出発」とは同時に「別離」でもあるのです。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

東日本大震災の前は自営業でした。園芸農家でね。1200坪のビニールハウスがあったんですよ。でも、すべて津波で流されました……あの震災でとてもたくさんの方々の人生が一変しましたね。肉親を亡くされて、辛い思いをされている方もたくさんいらっしゃいます。私の場合、幸い、家族こそ無事でしたが、やはり、人生はあの日を境にして大きく変わりました。とても大きく、ね。

空港ターミナルから眺めた異世界の光景

2011年3月11日、地震が発生した時はちょうど野菜の出荷準備をしているところでした。ものすごい揺れでね。直感的に「津波が来るな」と思いました。急いで近所の方々に声をかけて、私、妻、近所の方々で仙台空港に向かいました。空港ターミナルに着いて、急いで上階に上がって、しばらくすると、津波が黒い山のように押し寄せてきました。窓から下を見下ろすと、空港ターミナルの前の道路を車や家がぐしゃぐしゃになって流れていくのが見えました。まるで映画のような世界。とても現実の出来事とは思えず、窓の外を眺めながら「世の中、こういうことも起こるんだ」と自分に言い聞かせていた記憶があります。

あの日、仙台空港のターミナルビルには1400人くらいの方々が避難していたのだと思います。食事は、かまぼことお菓子類。空港のショップに置いてある物しかなかったので。

翌12日の夜、私はちょっと体調が悪化しました。元々、攣縮性狭心症の持病があったんです。血圧が上がってその症状が出始めました。舌下錠のニトログリセリンを口に含めば症状はおさまるんですが、急いで逃げてきたので持ち合わせていませんでした。すると、老人ホームから避難してきているお年寄りたちを空港から病院に送り届けるという話になったので、一緒に病院に行く車に乗せてもらうことにしました。通常の空港の出入口は津波で通ることができないため、滑走路の先にあった工事用出入口から外に出ました。

13日にはニトログリセリンも手に入れ、体調も回復したので、岩沼市の災害対策本部に赴きました。そして、「空港ターミナルに1400人が避難しているので、物資を供給してやってほしい」と頼み込みました。すると、「空港の出入口が通れないのでターミナルに行く手だてがない」と言うのです。私は「自分はターミナルから出て、ここに来たんだ。同じ道筋をたどれば行ける」と提案しました。さっそく、毛布、食料、水などをマイクロバスに積み込み、私も同乗して仙台空港に向けて出発しました。空港ターミナルに再び現れた私の姿を見て、妻はとても驚いていました（笑）。12日に出て行った後は「戻っては来ないだろう」と思っていたそうです。

避難所生活をしながら人生初の就職へ

それから3日間、空港ターミナルで過ごした後、16日に市が用意してくれたマイクロバスに乗り込んで避難所である旅館に移りました。空港ターミナルと違って畳の上に寝られるのはありがたいことでした。この避難所で息子と再会することができました。

津波の10日後、市のマイクロバスに乗せてもらって、家を見に行きました。もちろん、何もありません。家の基礎が残っているだけでした。結局、大津波を経て私たちの手元に残ったものは、トランジスタラジオ1台と妻のスニーカー1足だけでした。

旅館の避難所で半月ほど過ごして、3月の終わり頃に2つめの避難所に移りました。この2つめの避難所にいる頃、4月18日から、「みやぎ農業振興公社」で働き始めたんです。避難所にいる時に就職したわけです。この公社の方々とは、農業という仕事を通して10年来のつき合いがありました。4月に入ってすぐに「うちに入職して、いちごの苗の生産に携わってくれないか」と誘われていて……私は60歳まで自営業で農業をやってきました。組織に勤めるということは自営業を諦めるということ。1200坪のビニールハウスは流され、土地は塩害で再び作物を育てることは無理。この時に「生き方を変えよう」と決心したんです。それにしても、あの当時の状況で、よく私に声をかけてくれたものだと思います。10年かけて築いてきた信頼関係があったので、声をかけてくれたんだと思いますね。

仮設住宅コミュニティから離れる寂しさ

5月1日、岩沼市役所の近くの仮設住宅に移りました。仮設住宅には、度々、ボランティアの方々が来てくださって、無報酬でいろいろとやってくれて、本当にありがたかった。今でも、彼らには頭が下がる思いです。

30年ほど前の我が家。息子2人と姪のスナップ。

仮設住宅で3年間過ごした後、今年の5月1日に、この新居に引っ越してきました。ようやく安心……のはずなんですが、どうも喜びの実感がない。もちろん現在も辛い思いをされている方はたくさんおられるでしょうから、家を建てて暮らせる私たち家族は幸せな部類に入るのでしょう。でも……どこか、寂しいんですよ。

今年の春まで仮設住宅で一緒に暮らしていた方々は、避難所からずっと一緒だった仲間、同志です。仮設住宅から出てきてしまった今、堅い結びつきで結ばれていた仲間と離れてしまった気がして……。現在も仮設住宅に住んでおられる方々は、今後、災害公営住宅に集団移転される予定です。私たちはその流れから離れて、ここに引っ越してきました。どのように再起していくかは、それぞれの家族の選択ですから、どちらの選択をしても良いわけですが。

我が家は私の代で10代目だったんです。先祖からずっと岩沼の海に近い集落で暮らしてきた。でも、家も、私の人生も、あの津波で劇的に変わりました。私は農業を辞め、息子は被災後に結婚。息子には「今までの宍戸家はもういいんだ。これからはお前たちが新しい宍戸家を作っていけ」と言っています。

今、振り返ると……被災して、失ったものは大きいですが、得たものもある気がします。人が生きていくってことは、誰かと出会って、誰かと別れての繰り返し。もし、津波が来ていなかったとしても、出会いと別れを繰り返しながら、今も生きていたんだろうなと思っています。

［2014年5月28日。岩沼・宍戸正幸さん宅にて］

宍戸正幸：みやぎ農業振興公社職員。岩沼市出身。60歳まで自営で農業に従事。10代続いた宍戸家を受け継いでいたが、震災により家と畑を失い、団体職員へ転身。3年間の仮設住宅生活を経て、今年5月、新居を構えた。

INTERVIEW

樋口敏雄
樋口恵

石巻・開成地区
仮設住宅団地住民

「声かけ」が織りなす温かい日常。

豊かなコミュニティは、細やかな対話から醸成されていきます。
その細やかな対話はさりげなく声をかけることから始まります。
ここ、石巻・開成地区仮設住宅団地でも、
さりげない「声かけ」を絶やさぬキーマンが温かい日常を創り出しています。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

とてもうれしかった多くの支援

［恵］ あの日、3月11日のことですか……？ もちろん鮮明に覚えています。大津波が来た時、私は孫を抱いて逃げたんですが、水に呑まれてしまって、1時間くらい、水の中で助けを待ったんです。その後、なんとか屋根の上に避難。でも身体が濡れているので寒くて寒くて……。他所様の家の二階からお借りした毛布に孫とくるまって水が引くのを待ちました。そして、夜7時頃、意を決して屋根から降りて、渡波小学校の避難所に行きました。

［敏雄］ 私も水に呑まれたけれど、流れてきたタクシーに掴まって水の中で5時間、耐えました。その後、トイレの窓から自宅に入って2階で夜が明けるのを待ち、避難所に行きました。

［恵］ 後から夫は肋骨が3本折れていることが分かって……ガラスで足も切ってしまって。

［敏雄］ それでもこうして今は仮設住宅で暮らしていられる。運が良かったと思いますよ。その後は2ヶ月以上、自宅の2階で過ごして6月7日に開成地区仮設住宅に入居したんです。入居当初はキャンプ仲間たちからの支援がとてもありがたかったですね。私たち夫婦はキャンプが趣味でキャンピングカーを持っていたけれど、ローンも払い終わらぬうちに流されてしまった。それは残念でしたが、キャンプ仲間からの支援は嬉しかったですねぇ。

［恵］ 東京から車を運んできてくれて、そのまま私たちに車をくださった方、青森から家電一式を持ってきてくださった方、本当に助かりました。

［敏雄］ もちろん、キャンプ仲間からの支援ばかりでなく、ボランティアの方など、いろいろな方が支援してくださいました。本当にありがたかったです。

［恵］ 振り返ってみると、この3年間、私たち被災者はずいぶん甘やかされてきた気がします。支援されるという特殊な状況が日常化してしまったんですね。中には、支援していただいても御礼を言わないほどに慣れ過ぎてしまった方もいます。私たちはあらためて感謝の気持ちに目覚めなければいけないなと思います。

さりげなく声をかけることの大切さ

［敏雄］ 私が仮設住宅コミュニティのキーマン？ そんな大げさなもんじゃないです。ただ、ひとり暮らしのお年寄りにはなるべく声をかけるようにしているかな。私は若い人にはモテないけれど、おじいさんおばあさんにはモテるんですよ（笑）。

［恵］ 朝食を用意すると、なぜか、この人は行き先も言わずにどこかに出かけていることが多くて、いつも困るんですよ（笑）。大体、おひとりのお年寄りのところに行っているみたい。やっぱり、ひとり住まいの方は声をかけられるとうれしいみたいですね。

［敏雄］ ここの高齢者は10人が10人とも「仮設で暮らしている間には死にたくない」と言いますよ。ここから出て、どこかに腰を落ち着けてから最期を迎えたい、と。彼らにとってはそれが生きる目標となっていて、「ここでは死ねない」と公言する方ほど元気にしていらっしゃいます……高齢者ばかりでなく、ひとり住まいの方は精神的に追い込まれてしまうことが多いんじゃないかと思いますよ。この団地でも過去に自殺された方がおられました。周囲との交流がなく、ご遺体が発見されたのは死後1週間経ってからでした。もっと早く声をかければ良かったなと思いましたね……。

［恵］ ここに来たばかりの頃、車椅子の方が隣に住んでいらっしゃってね。あまり人との交流がないように見えたんですが、挨拶を交わし始めて、一緒に買い物に行ったりするうちに仲良くなって。私はこの性格ですから「さあ、行くよ！」って引っ張り出して集会所のイベントに連れて行ったりしているうちに、だんだん、外交的になってきて、いろいろな方と交流するようになっていきました。周りの方々も「あの人は身体が不自由だ」ということを知っていろいろとサポートしてくれるようになったし、ご本人に「今度、子供たちのイベントがあるから、お母さん（私はそう呼んでいました）、おやつを用意してくれる？」と頼むと、けっこう楽しそうに用意してきてくれるようにもなりました。だんだんコミュニティに溶け込んでいったんだと思います。

［敏雄］ ひとり住まいの方々に声をかけて回ることは「誰かがやるべきなんだろう」と思うので、私も回っているわけです。市役所の方々も回っておられます。ただ、プライバシーの問題などもあって、なかなか声をかけづらいようです。たしかに他人が玄関の中に入ってくるだけで嫌だという方もいるだろうから、難しいですね……私なんか、「いるかぁ？」と声をかけて、勝手に入っていっちゃうんだけど（笑）。

日々の対話によって人は変わっていく

［恵］ 被災して、肉親を亡くされて、とても大きな心の傷を負って……そこから立ち直ってきた方々もたくさんいらっしゃいます。ここでの知り合いに、津波で奥さんとお子さんを亡くされた方がいらっしゃるのですが、知り合った最初の頃は、ごく普通に会話を交わしていました。震災の話もしたことがありませんでした。「震災の話をしないようにしよう」と特に意識していたわけではないんですが、なんとなく、そういう話はしたことがなかったですね。でも、ある時、大川小学校での慰霊祭を伝えるTVニュースに映っていらっしゃったので、「あぁ、あそこでご家族を」と気づきました。その数日後、その方はご自分から、奥さんやお子さんを亡くされたことを話してくださいました……津波で肉親を亡くされた方とつき合っていくうえで、こちらが、意識してそのことに触れないようにすると、どうしても会話が不自然になります。だから、なるべく普通に、自然に。ご本人が話してくださるなら、自然に聞けばいいんだと思っています。難しいことですけどね。

［敏雄］ もう3年経ったからね……心に深い傷を負った方々も、少しずつ、そういう話ができるようになってきているのかもしれない……年月をかけて、人と関わっていくことで、人の気持ちは変わっていきますね。私たちも、いつかはこの仮設住宅団地から出て行くわけですが、今は、日々のさりげない「対話」を大事にして生活していきたいと思っています。

［2014年7月21日。石巻・開成地区仮設住宅団地にて］

樋口敏雄・恵：石巻・開成地区仮設住宅団地在住。震災時は水に呑まれながらも夫婦ともに生還したがキャンピングカーを流された。仮設住宅団地ではリーダー（世話人会会長）の補佐役として信頼が厚く、独居者とのコミュニケーションをはかる上でのキーマンとなっている。

phrase

text by Osamu Shimizu / photograph by Eiki Mori

それは言葉ではないのかもしれない。
しぐさか、眼差しか、あるいは、そこはかとなく漂う気配か。
心を通わせるために、人はあらゆるすべを試みる。
やがて、何かが通じ合う。
それでいて、永遠に分かり合えないもどかしさをも感じている。

思いは水面に現れた波紋のように広がり、隣人の波紋と出会い、融け合っていく。
思いの波紋が融け合う場に、私達はどれだけの希望を託してきたことだろう。

波紋は融け合いながら、いつしか、消えていく。
しかし、痕跡を残す。
ふたりが残していった飲みさしのコーヒーは、思いの波紋の存在を示している。
その存在を感じることも、また、対話なのではないか。

今日はどれだけの波紋を描いただろうか。
どれだけの痕跡を残しただろうか。
時空を超えた対話は、私達の知らないところで、今も続いている。

工藤古都美　臨床心理士／東北メディカル・メガバンク機構 メンタルヘルスケア推進室

INTERVIEW

こころを映し出す「鏡」となるために。

ToMMoの長期健康調査に参加した方々に、日々、電話支援を行う臨床心理士たち。
姿の見えぬ相手と気持ちを重ねる「対話」によって、被災地のこころの健康を見守る活動が少しずつ、進み始めています。

ToMMo ── 信頼を創り出す試み

はい、職業は臨床心理士です。現在はToMMoの「地域住民コホート調査」に参加してくださった皆さんに電話支援を行っています。私にとって、被災者の皆さんとの電話はとても大切な「対話」なんです。

被災地では 27%の住民に抑うつが

ToMMoが宮城県で行っている「地域住民コホート調査」と「三世代コホート調査」のアンケート票には、こころの健康状態をうかがう質問があります。地域住民コホート調査の回答を集計した結果、（今年2月時点の）回答者の27%の方々に抑うつ傾向がみられました。東日本大震災から3年が経ちますが、被災された方の多くがこころの問題を抱えていることがうかがわれました。中には、震災後に懸念されるPTSD（心的外傷後ストレス障害）やうつ病の発症・悪化が心配される方もいらっしゃいます。にもかかわらず、適切な支援が届いていない方がいます。そうしたお困りになっている方をひとりでも多く適切な支援につなげるために、ToMMoでは今、メンタルヘルスケア推進室の3人の心理士がお電話をして、現在のこころの健康状態を確認させていただいています。継続的に電話で経過をお聞きする場合もありますし、面接を希望される場合は、その方のお住まいに近いToMMo地域支援センターで面接をします。今後は、「三世代コホート調査」に参加してくださった皆さんも、同様に支援していきます。

通常、皆さんがイメージされる電話支援は相談者から電話をかける支援だと思いますが、ToMMoがしているのは心理士から電話をかけるという電話支援。相手のニーズがわからない中で電話をかける難しさや、顔が見えない難しさもありますが、相手の方が安心できて話しやすい雰囲気になるよう、心がけています。この電話支援を始めた当初は「東北大学から、突然電話が来て、見ず知らずの私と込み入った話をするというのは、皆さん抵抗があるだろう」と思っていたんですが、実際、始めてみると「今まで誰にも話せなかった」と、悩みをお話してくださる方が多いことに驚きました。自分から相談に行くのは……という方や、ご自身のこころの健康の問題に気がついておられない方とつながれることに、この電話支援の意義を感じています。

震災から3年、 つらさを語れない状況も

お話をうかがってみると、皆さん、様々なことで悩んでいらっしゃいますね……人間関係、家族のこと、健康のこと、仕事のこと、経済的な問題、お住まいのこと……仮設住宅に入って、それまでのご近所さんと離れてしまって孤独を感じている方、逆に、知り合いばかりでつらいという方。実に様々なケースがあります。中には、以前から睡眠の問題や抑うつがあって、震災によって悪化してしまった方など、すぐに医療機関に紹介したほうが良いと思われることもありました。また、「死にたいと思うことがある」と話される方もいます。誰にでも話せる話題ではないので、こうして打ち明けてくださることに感謝の気持ちを持って、対応しています。

全体的に言えることは、震災から3年が経過して、周りの人々と震災の話をしなくなったという方が多いことですね。家族や友人などに震災の影響による不安や心身の不調について話したくても、「3年も経ったのに今さら」と思われるのではないかと考える方も多く、誰にもそういう話ができなくなっている状況なのだと思います。悩み、不安、憂うつなことは、話を聞いてもらうだけでも気持ちが軽くなったり、整理されることがあります。そういったお手伝いを、私たちがしていけたらと思っています。

また、震災のことを「忘れたい」という気持ちと「忘れてはいけない」という気持ちに挟まれて悩んでいらっしゃる方もいます。震災の記憶も今の生活も、どちらも大事だと思います。無理せず、ゆっくりと、です。

被災者が 自らと向き合う対話を創り出す

電話支援では、まず、「自分の身体との対話」を促します。よく眠れているか、食欲があるか、震災を思い出したときに身体に反応がないかなどをお聞きすると、気にとめていなかったこころの不調に気づく場合もあります。たとえば、気分の落ち込みはあるけれど病院に行くほどではないと思っている場合も、そういえば最近寝つきが悪いなぁ、疲れやすいなぁといった不調が身体に現れていることはよくあります。日常生活に支障を感じる場合は、医師に相談することをお勧めします。

人って、自分の中でいろいろな物事が整理できていないと「よく分からないけど不安」という気持ちになりますよね。心理士との対話は、そういった不安や説明しにくい気持ちを一緒に考えたり、複雑に絡み合った問題を一つひとつ、紐解いたり並べたりして、こころを整理していく作業なんです。客観的に自分を見つめることで、行き詰まり感が和らいだり、新たな気づきがあったりして、皆さん、話している間にだんだん考え方が変わっていきます。心理士との対話が、「自分のこころとの対話」になっていきます。また、震災によってつらい思いをされてきた方と震災以後を共に振り返り、「大変な思いをして、ここまで来たんだなぁ」と、その方が自分を見つめ直すきっかけになればとも考えています。

支援する際には、心理士が「鏡」となって、被災者の皆さんが自分自身と「対話」できるように努めている感じですね。

私の「対話のフレーズ」は、「話してくれて、ありがとう」。電話を切る時に「聴いてもらえて気持ちが楽になった」と言ってくださる方がとても多く、その言葉を聞くたびにうれしくなります。それに、自分のことを話すのは、とってもエネルギーがいりますよね。ですから、話してくださったことにもいつも感謝しています。これからも、この大切な「対話」を続けていきます。

［2014年6月27日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟会議室にて］

▶ 臨床心理士とは？

臨床心理学など心理学の知識や技術を用いて心理的な問題を扱う心理専門職。「財団法人日本臨床心理士資格認定協会」が資格を認定しています。複雑化する社会の中で心理的課題を抱える方が増え、医療・保健、教育、福祉、司法、産業など様々な領域で臨床心理士による援助が求められています。

▶ 抑うつ、PTSDとは？

「抑うつ」とは、ストレスや身体的な状態など、様々な原因で気分が落ち込み、身体に不調があらわれる状態のことです。集中力や意欲の低下、睡眠障害、食欲の低下などがみられます。「PTSD（心的外傷後ストレス障害）」とは、命の危険を感じるような体験が、こころのダメージとなって、時間がたってからも、その経験に対して強い恐怖を感じる障害です。

工藤古都美：東北大学東北メディカル・メガバンク機構予防医学・疫学部門災害精神医学分野メンタルヘルスケア推進室、研究支援者。臨床心理士。山形県出身。東北大学大学院教育学研究科修士課程修了。2013年4月よりToMMoで心理士として勤務。ToMMo事業のアンケート調査から、震災後に悪化が心配されるメンタルヘルスの実態を明らかにし、浮かび上がるメンタルヘルスの問題のケアに尽力している。

患者さんのすべてを受け入れるという心。

復興は少しずつ、進んでいると思いますよ。南三陸町に住んでいる間も、毎日、少しずつ、景色が変わっていきました。物が撤去されたり、土地がかさ上げされたり。お店が少しずつ増えたり。そういう「目に見える復興」は少しずつ進んでいると思います……しかし、被災地に住む皆さんのこころの中までは、ぼくには……。

東日本大震災が発生した時、ぼくは大学院生で博士論文の〆切に追われていました。震災直後に東北大学医学部の人々は石巻や気仙沼に医療支援に行ったんですが、研究室も地震でぐしゃぐしゃに散乱した状態だったので、ぼくは大学に残って研究室復旧と大学病院での診療に携わりました。一度だけ、石巻に行って避難所の皆さんの健康状態をうかがうという仕事をさせていただきましたが、ずっと「被災地の医療支援を本格的にやりたい」と思っていたんです。その後、教授から「被災地の病院に手伝いに行ってくれる医師を探している」という話をうかがった時、躊躇なく「行きます」と手を挙げていました。それで、2013年2月から5月までの間、ToMMoクリニカル・フェローとして公立南三陸診療所に赴任しました。4ヶ月間の赴任後、一度、東北大学に戻ってきて、翌2014年、つまり今年の2月から5月の間、再び南三陸診療所に赴任しました。2年連続で南三陸町に行ったんですね。

一度目に南三陸町に赴いた昨年は、津波の爪痕がまだ残っていることに驚きました。ただ、被災されたスタッフも患者さんも、明るくお元気そうだったので安心しました。本当は、皆さん、辛さを見せずに必死にがんばっていたのかもしれないとも思いますが……二度目に南三陸に赴いた今年は、心なしか、スタッフの皆さんに「疲れ」が見える気がしました。震災後、3年間、ずっとがんばってきた疲れと言えばよいのでしょうか、「休ませてあげたいな」と思いましたね。

昨年と比べると、今年は患者さんもスタッフの皆さんも、だんだん被災の話をしなくなってきた印象があります。震災直後は皆さん、「力を合わせてがんばろう」ということで強く意識を共有していたのだと思いますが、やはり、被災の度合い、内容は人それぞれですので、3年経った今、被災に関する意識は共有しづらくなってきているのではないでしょうか。それでも、診察をしていると、さらりと被災のことを話される患者さんがいらっしゃいます。アルコール性肝障害の60代男性の患者さんがそうでした。通常ならば、こちらも「アルコールを止めましょう」と強く言うところなんですが、「家族が流されてひとりぼっちになってしまったので夜は飲まずにはやっていられない」とおっしゃるのを聞いて、ぼくは何も言えなくなってしまいました。幸い、経過観察したところ、その後、悪化はしませんでしたが。

患者さんとお話しする時、ぼくは「すべてを受け入れる」つもりで「対話」しています。しかし、完全にこころを開いてくださるところまで関係を築くのは本当に難しい。被災のようなデリケートな話であれば、なおさらのこと、難しい……でも、だからこそ、「対話」を続けていく意味がある。どこまでも患者との「対話」を続けて関係を構築していくことが、医者の仕事の本質なのだと、常々、感じています。

［2014年6月30日。東北大学 東北メディカル・メガバンク棟会議室にて］

INTERVIEW

近藤敬一　ToMMoクリニカル・フェロー／医師

ToMMo ── 信頼を創り出す試み

近藤敬一：東北大学東北メディカル・メガバンク機構地域医療支援部門・助教。1991年パリ国立高等音楽院フルート科を卒業、1993年同院第3課程を卒業、2004年東北大学医学部を卒業。坂総合病院で研修後東北大学糖尿病代謝科に入局、2012年博士課程修了。同年10月よりToMMoクリニカル・フェロー。日本糖尿病学会糖尿病専門医。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

ToMMo ── 信頼を創り出す試み

黒羽正剛　ToMMoクリニカル・フェロー／医師

INTERVIEW

訪問診療が紡ぐ新たなコミュニケーション。

もともと、つまりToMMoクリニカル・フェロー（TCF）制度に参加する前から、私にとって地域医療は特別なものでした。仙台市出身の東北人として、医師として、震災後の地域医療を崩壊させないよう命を受けたのは、当然のことだと思っています。

震災直後から気仙沼に飛び、本当の急性期の患者さんを診ることになってから、2013年にTCFになるまで、2年間、地域医療に携わってきました。忘れられないのはやはり、あの被災した気仙沼の光景、そして現実。そのなかで医療をやるという難しさ。当然ですが、患者さんそれぞれによって、バックグラウンドが違うんですね。かなり被災でダメージを受けている方もいる。一方で家族みんな元気でやっています、という方もいる。それで、かなり対話に気をつけなければならない。でも、「対話」って、特に被災地での医療で重要という結論になりがちだと思うんですが、医療におけるすべての場面で、「対話」は重要じゃないですか。でも実際はそうでないから、問題になる。

私自身、それを実感したのが、訪問診療の場面です。たとえば、慢性の高脂血症とかで、病院に来る患者さんがいる。そのときは明らかに「病人」なんですね。でもそんな患者さんの自宅へ訪問診療に行くと、病院ではあまり喋ってくれない人が、家ではきちんと喋ってくれる。単なる「会話」ではなく、「対話」になっている。患者さんが患者さんに見えないのが不思議なんですよね。「自分は病人ではない」という気持ち―そして医療者の気持ちも、無意識に変化しているのだと思います―これがコミュニケーションの形そのものを変化させてゆくんですね。患者さんの家族との対話も、基本的に同じだと思います。家族の理解が得られないと、訪問診療も、在宅での医療も、続かないですから。だから、私たちもそのような環境を作っていく。仮設住宅への訪問診療は、仮設が無くならない限り、続けていきます。そうしないと、復興は終わりません。

私にとって、すでに「私は気仙沼というコミュニティの中にいる」という事実があります。しかし、「コミュニティの中で私に何ができるか考え続けること」はとても難しい。でもとても大事なことです。日頃から、地域医療・訪問診療とはいえ、「医療の質は落としてはならない」ことは常に考えていますが、やはり難しいです。ですが、少しだけそれに応えることができたかな、と思うのは、震災後、気仙沼の医療を続けてきて、大腸がんの早期発見・早期治療に貢献できたことです。大腸検査をする、という習慣が、入院患者さんに対しても、あまりなかったので、患者さんに勧めて。治療が必要な患者さんには、内視鏡でポリープを取る治療を地域で初めて開始しました。消化器内科の専門医として、自分の専門が活かせたことも、患者さんからも感謝されたことも、市役所の方から感謝の言葉をかけてもらったのも、純粋にとても嬉しかったですね。

私の年齢だと、普通はもっと、高度医療、大学病院の医療をやるのが一般的なのでしょうけれど、地域医療の現実に衝撃を受けた自分としては、もちろん先進的な医療も学びたいですが、次にまた気仙沼に行った時には、自分が診た患者さんが更に元気になっていて欲しい、という思いが強いです。これまでこの地域に赴任された先生方が作られた「信頼」が地域コミュニティの中に確実にあって、私はそれを引き継いでゆく。「信頼」と「対話」を積み重ねてゆく。そのなかで学べることは、「支援」ではあるけれど同時に私にとってのまさに「学び」だと思うんです。

［2014年7月31日。東北大学 東北メディカル・メガバンク棟3階ミーティングルームにて］

黒羽正剛：東北大学・東北メディカルメガバンク機構地域医療支援部門・助教。2005年岩手医科大学医学部卒。仙台市医療センター仙台オープン病院で臨床研修後、東北大学病院消化器病態学分野に入局。2012年東北大学大学院医学系研究科博士課程を修了後、岩手県立胆沢病院勤務を経て2013年4月からToMMoクリニカル・フェロー。専門は消化器内科、下部消化管分野。

text by Soichiro Toda / photograph by Kenichi Chiba

▶ 三世代コホート調査とは？

ToMMoでは、「地域住民コホート調査」、「三世代コホート調査」という2つの長期健康調査を実施しています。地域住民コホート調査は、住民一人ひとりの健康状態を長期間にわたって調べる調査です。三世代コホート調査は、妊婦さん、生まれてくるお子さんを中心に、お子さんのお父さん、おばあさん、おじいさん、生まれてくるお子さんのごきょうだいといった「三世代にわたる家族」やその他のご家族の健康状態を長期間にわたって調べる調査です。ToMMoでは、宮城県内の各産科医療機関にToMMo GMRCが常駐する形で妊婦さんにお声がけし、三世代コホート調査をすすめています。具体的な調査内容としては、通常の健診よりも詳細な検査を行い、同時に生活や健康に関する詳しいアンケートを行います。以後はお子さんの生後半年目、1年目、5年目など、何度かアンケートや詳細な検査にご協力いただきます。長期にわたってご協力いただくことで、その調査結果は様々な病気の解明や未来の医療に役立っていきます。
［ToMMo三世代コホート調査HP］ http://www.megabank.tohoku.ac.jp/3gen/

各地の特定健診会場で行われている地域住民コホート調査のインフォームド・コンセントの様子

▶ ToMMo GMRCとは？

ToMMoゲノム・メディカルリサーチコーディネーター（ToMMo GMRC）は、ToMMo GMRC認定制度により資格認定された職種です。具体的な仕事としては、ゲノム解析をともなう調査・研究の現場において「調査・研究に関して丁寧に説明し、その方のご意向をうかがい同意書に記載いただいたり（インフォームド・コンセント取得）、調査・研究の実施をサポートする」という一連の仕事となります。ToMMo三世代コホート調査において、ToMMo GMRCは宮城県内各地の産科医療機関に常駐し、妊婦さんのインフォームド・コンセントを得て調査への参加をお誘いしています。また、地域住民コホート調査においては、県内各地で行われる特定健診会場において、住民の皆さんのインフォームド・コンセントを得て、調査への参加をお誘いしています。

草野久子　ToMMo GMRC／岩沼市・スズキ記念病院駐在

INTERVIEW

流れゆく笑顔の「時」に寄り添うということ。

ToMMo三世代コホート調査は、生まれてくる赤ちゃんの未来を照らす大切な健康調査。
ToMMo GMRCは、今日も、幸せあふれる産婦人科の一室で、妊婦さんとの和やかな「対話」を続けています。

産婦人科って、ハッピーとの出会いがあるんです。妊婦さんと、お腹の中にいるお子さんの未来のお話をする時、GMRC室は笑顔に包まれます。私たちGMRCは妊婦さんとの「対話」によって、幸せの中にまぜてもらう感覚です。

言葉のキャッチボールを続けながら

現在、私はToMMo GMRC（ゲノム・メディカルリサーチコーディネーター）として、岩沼市のスズキ記念病院に常駐し、妊婦さんに「三世代コホート調査」へのご参加をお願いする仕事をしています。妊婦さんとお話しさせていただいていると、私自身も日頃のいろいろなことを忘れて和やかな気分になれますね。

私は元々、看護師をやっていたんですが、以前から産婦人科は憧れの職場でした。看護師をやりながら「助産師になりたいな」と思っていたくらいです。現在は憧れの産婦人科の病院で妊婦さんとお話しさせていただく仕事に就けてとても充実しています。

妊婦さんへのインフォームド・コンセントは、本来、「必要なことを十分に説明して、コホート調査へのご参加の意思をうかがい、参加不参加を決めていただく」という一連の仕事です。でも、これは一方的な説明作業ではなくて、妊婦さんとのとても大切な「対話」なんです。当初は20分くらい、同意書を読みあげていたんですが、それでは妊婦さんは疲れてしまうことに気づいて、言葉のキャッチボールをするように、つまり「対話」をするようにしていきました。「ゲノムについて何かご存知のことはありますか？」とうかがうと、「アンジェリーナ・ジョリーさんのことなら知っています」などと答えてくださいます。もちろん、話し方は人それぞれですので、妊婦さんのペースに合わせて対話します。情報がたくさんほしいという方には、どんどん話していきますし、聞きたいことがはっきりと決まっている方には、掘り下げてお話しながら、質問に耳を傾けます。ゆったりとしたペースで話される方には呼吸を合わせて話します。また、時には哀しくせつないことと隣り合わせになる場面もあります。妊婦さんとの時間に寄り添い、気持ちを合わせていくには、謙虚さと誠意が一番大切だと感じています。

二度の震災を経験して

私は神戸市出身で、19年前に阪神・淡路大震災を経験しました。その後、結婚して岩沼市に転居し、東日本大震災も経験しました。震災を2回、経験しています。

神戸で被災した時は家が半壊し、横になってしまいました。とても怖かった……いまでも、あの時の怖さははっきりと覚えています。あれから20年近い年月が経ったわけですが、年月が経てば経つほど、あの怖さを強く感じます。東日本大震災では、幸い、家族も住まいも無事でした。でも、TVで東日本大震災の映像が流れていると、阪神・淡路大震災の怖さを思い出してしまうんです。だから、東日本大震災で辛い思いをされた方々とはちょっと違う理由で、震災の映像に触れないようにしています。

それから、神戸で経験した「町が止まった状態」を東北でもう一度経験したことは、私の人生や考え方に大きな影響を与えている気がします。震災で町が止まってしまうと、ふだん考えている家族のことや仕事のことではなく、食べ物、水、トイレ、衛生環境など「生きる基本」に目が向く状態になります。そういう時はひとりで出来ることが限られていますし、「情報」がとても大切になるので、周囲の方々との「和」を強く意識することになります。皆で助け合って、情報を交換しあって、状況に対応していく。「○○スーパーが再開したそうよ」といった情報を誰かからいただいて、やっと買い出しも可能になります。

GMRCとして妊婦さんと「対話」している時にも、やはり震災のことを強く意識せざるをえません。「震災」が結婚のきっかけになった方もいます。皆さん、震災体験とともに生きているんですね……被災された方とされなかった方では「時間の流れ」が違うのだと思いますよ。被災された方にとっては「まだ3年」、「やっと3年」。被災されなかった方にとっては「もう3年経ったんだ」。私が神戸で被災した後も、お隣の大阪の方々とは「時間の流れ」の違いを強く感じていました。

皆さん、震災で辛い思いをされたけれど、子供ができて、新しい家族が増えて、これからは新たな時間の流れを感じていくのだろうと思います。私たちGMRCはその出発点に関わらせていただいているんですね。

三世代コホート調査に関わるGMRCの仕事は、その方の人生の流れに少しだけ登場し、「出産」という大きな出来事に寄り添って、やがて離れていくというお仕事。とても光栄に思います。もちろん寄り添う時には常に妊婦さんの「呼吸」に合わせて……。

私の対話のフレーズは、「『時』をともに」。私にとって、妊婦さんとの対話は、その方の「時」に寄り添うことなのですから。

［2014年7月4日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟3階ミーティングルームにて］

草野久子：宮城県岩沼市在住。神戸市出身。神戸市立中央市民病院に勤務した後、阪神大震災を機に結婚し家族の転勤で宮城県に移住する。1児の母。ボーイスカウト岩沼1団所属。マリンピア松島水族館ファンクラブの運営を行う。

text by Osamu Shimizu / photograph by Kenichi Chiba

目時弘仁

東北大学東北メディカル・メガバンク機構 地域医療支援部門 講師

対話のphrase

1つ1つ確かめあう事

INTERVIEW

未来の健康を見つめる「対話」を重ねて。

現在、ToMMoでは「地域住民コホート調査」と「三世代コホート調査」という2つの長期健康調査を実施しています。私はこのうち、「三世代コホート調査」に携わっています。多くの市民の方々のご協力を得て、日々、少しずつ進んでいく長期健康調査。ご参加いただいている方々には本当に感謝しています。

ToMMoの長期健康調査では、普段の健診よりも詳しい、ゲノム解析も含む「身体の検査」を行い、同時に、健康に関する「詳しいアンケート」にお答えいただいています。ToMMoではいただいたデータを集計するとともに、個人個人の調査結果を参加者の皆さんにお返しして、健康管理に役立てていただいています。このやりとりが、まさに、参加者の心身とToMMoとの「対話」なんですね。

ただ、ゲノム解析結果に関してだけは、結果回付等検討委員会で「結果をお返しするかどうか」をしっかりと検討することにしています。なぜなら「ゲノムと病気の関係」は、まだまだ分からない部分ばかりだからです。

ToMMoでは参加者からご提供いただいた情報をもとに「ゲノムと生活環境と病気の関係」を解明しようとしています。たとえば、高血圧、糖尿病、喘息、アトピー、自閉症などの症状は、遺伝と生活環境の両方の影響で起こります。このうち、遺伝の要素に関してはまだ詳しいことがあまり解っていないんです。これを少しずつ解明していくにはとても時間がかかります。数年で分かってくることもいろいろありますが、詳細なことが分かるには、おそらく20年、あるいは30年という歳月がかかるでしょう。有用な研究結果が出てくるのは参加者の皆さんのお子さんの時代になります。ですから、この調査でもっとも恩恵を受ける人々は、将来を担う子どもたちなのです。

なぜ、被災地でゲノムを？ そう思われる方もおられるかもしれません。この問いに対して、私は2つ、答えがあると思っています。

ひとつめの答えは「次の災害に備えるために」ということです。東北地方太平洋側の地域は数十年間隔で大地震・大津波に襲われる可能性があります。次に大きな災害がやってくるのは50年後、あるいは30年後かもしれません。今、ゲノム解析も含めた（被災後の）長期健康調査を行うことによって「大災害後の健康被害状況の推移、健康被害とゲノムとの関係」を解明することができれば、不幸にも次の大災害が起こってしまった場合、市民（皆さんのお子さんの世代）に健康に関する注意喚起ができます。また、様々な健康被害の予防を行うことができます。大災害が起こりやすいこの土地であるからこそ、ゲノム解析とそれによる医科学研究を進めるべきなのです。

ふたつめの答えは、「ゲノムは地方に根ざしたものだから」ということです。私たち人間のゲノムは、厳密に見ると一人ひとり違います。しかし、住んでいる地域によって似ていたり似ていなかったりします。たとえば、ヨーロッパ人と日本人を比べた時よりも近隣のアジアの国の人と日本人を比べた時のほうがゲノムは似ています。また、近隣のアジアの国の人と日本人を比べた時よりも日本人同士で比べた時のほうがゲノムは似ています。一般に、住んでいるエリアが近いほどゲノムは似ているんですね。日本の国内で考えても同様です。実際に比べてみなければ正確には分かりませんが、おそらく、東京の人々と仙台の人々を比べた時よりも、仙台の人々と宮城県内の人々を比べた時のほうがゲノムは似ているのだろうと思います……そう考えると、「東北」という地方の人々のゲノムを調べて研究していくことで、この地方の人々にもっとも適した医療を開発していくことができるわけです。これこそが、この地方のための「健康の復興施策」と言えるのではないでしょうか。

未来の健康を創り出すための「対話」はまだ始まったばかり。これから少しずつ、この「対話」の成果が生まれてくることでしょう。

［2014年8月15日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟3階・ミーティングルームにて］

▶ ToMMoコホート調査の結果回付が始まっています

昨年から始まったToMMoの「地域住民コホート調査」と「三世代コホート調査」。今年9月現在で、地域住民コホート調査では29,117人の方にご登録いただいており、三世代コホート調査では10,000人を超える方々にご参加いただいています。これらの調査の進展にともなって、参加者の皆さんへ少しずつ、調査結果をお送りしています。また、地域住民コホート調査の結果回付にともなって、昨年末より、何度か、調査結果報告会を開催しました。報告会は、胃がんリスク、アレルギー検査結果、睡眠やこころの健康の評価、栄養計算結果などについての説明を行い、健康管理に役立てていただこうというものです。被災地の市民の健康を見守るToMMoのコホート調査は、これからも続きます。

送付される調査結果シート

東松島市での調査結果説明会の様子

text by Osamu Shimizu

対話のphrase

被災地住民の皆さんやToMMoメンバーに、「対話する時に相手に話しかけたい言葉」、「対話する時に一番大切なこと」、「対話に関して思うこと」などを綴ってくださいとお願いして、実際に「対話のphrase」を手書きしていただきました。

明日はきっとたどりつく
── いつもそういう希望だけは持って。

［ チェスワフ・ミウォシュ］

相手の立位置で！

中島敏さん
（プロダクツデザイナー・仙台荒浜出身）

家族は無事でしたが、若い社員2人を亡くしました。今でも夜中に津波の夢を見て目が覚めます。

佐藤優子さん
（漁業 仙台・荒井小学校用地仮設住宅住民）

大津波で家は流されましたが、家族は無事でした。人に声をかけることの大切さを強く感じます。

こんにちは。今日、天気いいね

想いをこめて

佐藤芙美恵さん
（ToMMoスタッフ スズキ記念病院駐在）

震災で家族は無事でしたが、家は半壊。対話の際には、想いを込めてお話ししたいですね。

高橋由佳さん
玲奈ちゃん、咲奈ちゃん
（仙台・復興住宅住民）

3年間の仮設住宅生活を経て4月から復興住宅に移り住んでいます。仮設住宅より落ち着きますね。

こんにちは 調子はどう？

「心の声」を聴きたいな♥

伊藤ひろみさん
（ToMMo GMRC スズキ記念病院駐在）

震災時は、被災地の宮城病院に看護師として務めていました。自宅は無事でしたが、被災後の病院は大変でした。今はGMRCの仕事も含め、様々な方と対話をしていますが、ご本人が「だいじょうぶ」と言っても大丈夫じゃないことも多いと感じています。だから、「心の声」を聞きたいなと思って「対話のphrase」を書きました。

感謝

貴田恵子さん
（仙台・荒井小学校用地仮設住宅住民）

被災後、感じたことです。家族愛、郷土愛、助け合いの心、皆様への感謝の心。すべて結のおかげだと思います。

中島美紀さん
聖也ちゃん
（仙台・荒井小学校用地仮設住宅住民）

被災後に結婚・出産。仮設住宅生活も3年経って、皆さん、疲れを感じているのではないでしょうか。

ありがとう

楽しく笑顔で!!

花沢美佳さん
（ToMMo GMRC スズキ記念病院駐在）

対話の際には、その場を楽しい雰囲気にして、相手に心を開いていただけるよう心がけています。

人間の**都合**、**遺伝子**の企み

第2回

あなたのDNAはどこへ行く

長神風二［サイエンス・コミュニケーター］

DNAはあなたのもの?

似ていると言えば似ている。違うと言えば違う。

パーツを見ればその通りのところはある。生き写しのようか、と問われれば間違いなく違う。だけど、もう一人の自分とされる生気のない顔と向き合っている――。

あなたの遺伝情報はどれだけあなたを形作るだろうか? そんな疑問と共につくられた作品群がある。タイトルは"Stranger Vision"、ニューヨーク公共図書館やアルスエレクトロニカフェスティバルなどで展示が行われ国際的な反響を呼んでいる、芸術家Heather Dewey-Hagborgの作品だ[※1]。彼女は、道端に捨てられたタバコの吸い殻から、あるいは噛み捨てられたガムからDNA解析を行い、その結果をもとに「落とし主」の顔を「復元」し、3Dプリンターで造形して落とし物の写真と共に展示する。

もし「落とし主」がつくられた顔に対面したら、冒頭のような感想を持つだろうか? そもそもどれだけ似ている可能性があるのだろうか。どれだけの情報が抽出可能で、その情報は、どれだけ顔形の予想に結び付けることができるのだろうか? そして、そうやって情報を抽出したり復元したりすることは、どこまで許されるのだろうか?

誰があなたのDNAを触ることができるのか

この作家はDNA抽出などの作業を自分で行っている。ニューヨークには「公共の生命科学研究室」を名乗る非営利団体運営のラボがあり、自分で実施するのであれば、かなりのレベルの実験を行える[※2]。今回の作品で用いられたのは、個人の遺伝情報の中の部分的な情報だ。2012年からこの作品が展示されているから、実際の実験等が行われたのは少なくともそれより前、2014年の現在、もし最先端の技術が利用可能であれば、当然、もう少し精度の高い情報、例えば全ての遺伝情報、を得ようと思えば得ることができる。

タバコの吸い殻や、噛み捨てたガムだけならば、マナーを守れば遺伝情報が他人にわたることを防ぐことができるが、どうしようもないこともある。レストランで食事をして、全ての口をつけた食器を持参した紙などで拭った上で、その紙は持ち帰って焼却でもするのだろうか? 髪の毛を一切落とさないように、髪を剃るか特別な工夫でもするのだろうか? 外出先でトイレの利用はどうするのだろうか?

あなたのDNAに書かれた遺伝情報は、その気になりさえすれば、いともたやすく、そばにいる他人がアクセスできるものなのだ。

DNAの情報から何がわかるか

体細胞クローン羊ドリーが1996年に生まれた時の反響の一つに、ヒトラーを模した人物が多数複製された漫画が掲載されたことを覚えている。体細胞クローンとは何か、と言えば、ある生物個体の体細胞（生殖細胞以外の細胞ならばどこでもいいが、ドリーの際には乳腺の細胞）から核（ゲノムを運ぶDNAが入っている）を取り出して、それを別の卵細胞から核を取り除いたところに導入してできた個体のことだ。DNAに書かれている遺伝情報が全て、新たな細胞に受け継がれて、それが個体になる。ヒトのクローンをつくることは禁じられているが、もしつくった場合に、それは漫画に描かれたような「そっくりさん」だろうか?

この問いは、先に挙げた芸術作品のサイトに挙げられたQ&Aにある、「一体どのくらい正確なものなのか?」という問いとも関わってくる。サイトでは、作者は「第一に、アート作品であって技術や製品じゃない」と答えを始めている。その質問が頭に去来することがそもそものアートの目的なのだろう。実際、今回の作品において解析されているのは、性別、人種、瞳の色、そばかすの多寡など限られた要素で、そこに作家の手が加わった上で造形されている。作家の手法をなぞる限り、「驚くほど似ている」というものができてくることは流石に考えにくく、「誰かわかったと申し出た人はいるか?」という問いには、「誰も」と答えている。ただそれは、ある意味で限定的にDNAの情報を用いている作品の場合であって、前述のとおり、本気になって解析を行えば全遺伝情報が利用できることになる。

全遺伝情報が同じと言えば、読者の方々はまず、一卵性双生児を思い浮かべるだろう。DNAにある情報が全て同じ二人は、時に他人には見分けがつかないほど、外見が類似している。だが、一卵性双生児では実は遺伝情報以外に共通していることが多数ある。まず、卵細胞の中にあるものがほぼ同一であるし、受精から胎内で育ってきた環境がほぼ同一だということがある。DNAの情報のみを取り出した体細胞クローンと一卵性双生児とが決定的に違うところが、この胎内環境の一致だろう。こうしたことが、例えば顔かたちの相違にどれだけ影響するのかについて、はっきりとした研究はまだ、ない。

はっきりとしたことはないが、ほかに一つだけ例を挙げておくと、相貌ではないが見かけに関わることとして、身長の例がある。この100年で日本人の平均身長は男女共に10センチ以上伸びている[※3]。だが、この間に日本人全体に対して起こったDNA上の変化は、多少海外から流入があったにしてもごくわずかに過ぎない。非常に大雑把な言い方だが、これだけの変化が、ほぼ育ち方（栄養、運動など全ての要素を含む）の変化という環境要因によって生じている、とも言える。

身長や顔かたちはしかしながら、ある程度、罪のない部類の情報かも知れない。アート作品で顔を取り上げられたのは、あくまでそのインパクトが強いからだろう。また、先号で触れた通りDNAは必ずしも何かを決定してしまうことは想像されるほど多くなく、もう少し「柔らかい」ものだが、それでも、それなりに相当なことは決まってくる。

例えば、健康や病気に関わる一部のこと。その要因を持てば乳がんに罹患する確率が5-10倍になるとされる遺伝子の変異は、女優アンジェリーナ・ジョリーさんの例で話題になった。あるいは、先号で書いた、難病の要因になるようなこと。その因子を父方から来た遺伝子、母方から来た遺伝子双方で二つ合わせ持ってしまえばほぼ必ず病気になってしまう、というものがあり、多くの人は多くの病気で"片方だけ"持っているという事実。

そして、そういう情報がいともたやすく他人の手に入り得る世界、というのはどういう世界なのだろうか?

あらゆる場所にDNAの情報がある世界へ

近未来の状況を想像してみる。

あなたが一緒に仕事をするために、これから会う人がいる。その人の遺伝情報はちょっとした工夫で入手可能だ。入手することは禁じられていないが、あなたにはそれをしないという選択肢もある。入手した上で何らかの差別に使うことは許されないことだが（2014年現在で、それを明確に禁じる法律は日本には存在しないが）、入手した情報をもとにその人との働き方のあり方に活かそうと考えることはできる。

そして何より、先方は、あなたの情報を既に手に入れているかも知れない。

私たちは、間もなく岐路に立つ。

日常的に遺伝情報を利用することを徹底的に制限する社会を築くことができる。口をつける食器を扱う店では、食器をぬぐうための専用の紙が配られ、使用後にそれを自ら焼却する設備がある。トイレは水洗式ではなく現在も高所作業などで使われている高温焼却式が一般的になるだろうか。実現できないことはないが、管理コストはどのくらいになるのだろう。

あるいは、遺伝情報が相互に参照し合えることを「前提」にして、いわれない差別は排しつつも、膨大な情報を積極的に活用していく社会を築くのか。

岐路に立つ前に、相当な予習が必要そうだ。

期限は少しずつ迫ってきている。

（東北大学 東北メディカル・メガバンク機構 広報戦略室長）

※1 Heather Dewey-Hagborgのウェブサイトhttp://deweyhagborg.com/参照。

※2 GENSPACE http://www.genspace.org/　自分で実施するのみならず、科学者によるコンサルテーションなども受けられるようだ。

※3 例えば、1900年時点で22歳時の身長は男性160.0センチ、女性147.9センチだったが、1997年にはそれぞれ171.5センチと158.9センチになっている。総務省統計局「日本の長期統計系列」による。

対話のphrase

想像すること

illustration by Shiho Honda

フレーズ
[phrase] vol.02
2014.10 Issue
Tohoku Medical Megabank Organization

東北メディカル・メガバンク機構 広報誌
発行/2014年10月31日
編集発行/東北大学 東北メディカル・メガバンク機構
〒980-8573 仙台市青葉区星陵町2-1
Tel. 022-717-8078
http://www.megabank.tohoku.ac.jp

TOHOKU UNIVERSITY

[副機構長に訊く]

末永く支援を続けるということ

八重樫伸生［東北大学 東北メディカル・メガバンク機構（ToMMo）副機構長］

INTERVIEW

東日本大震災が発生した3年前の3月11日、産婦人科医である私は東北大学病院副病院長の職にありました。幸い、東北大学病院では大きな地震被害はなかったのですが、市内の産婦人科病院を回ってみると、電気も水道もストップしている、屋上の水のタンクが壊れて水が使えない、煙突が倒れてしまったなど、被害は甚大でした。しかし、そんな時でもお産は待ってくれません。震災から数日の間にも毎日、赤ちゃんが生まれていたんですよ……電気が止まっているので、ロウソクを灯して帝王切開を行ったという病院もありました。東北大学病院では、あっちの病院に行ってくれ、こっちの病院に行ってくれと医師たちに連絡して、市内の各病院に医師を配置し続けました。いわばコントロールセンターのようなことをやったわけですね。

戦場のようだった石巻と気仙沼の医療現場

震災後2日間、仙台市内の医師の配置を続けながら、東北大学医学部と東北大学病院でいろいろと対策を話し合い、「とにかく石巻と気仙沼の病院が大変なことになっているだろうから、状況把握も兼ねて医師の派遣をしなければ」ということになりました。14日に石巻に第一陣が出発。私は15日に第二陣の隊長として石巻に赴きました。石巻では、石巻赤十字病院のみが機能していて、それ以外のほぼすべての病院は機能停止の状態となっていました。もう、すごかったです……災害時なのに、人口15万人以上の石巻市内にひとつしか病院がない状態ですから、当然、石巻赤十字病院は野戦病院のように患者さんで埋め尽くされ、混乱していました。ただ、私たち東北大学病院からの応援だけでなく、日本赤十字社のネットワークのおかげで、この時から後々まで、全国の多数の医療スタッフが支援を続けたことは心強かっただろうと思います。

石巻に2日遅れて、気仙沼にも赴きました。こちらも市内の病院の多くが機能停止していて、被害が少なかった気仙沼市立病院が震災直後の医療を引き受ける形になっていました。気仙沼市立病院は他地域との医療連携ネットワークがなかったので、孤立した状態になることが心配でした。実際、震災後の3、4日間は、ライフラインが止まる中、迫り来る火事にも備えながら、本当に大変だったようです。が、幸い、重油の備蓄があったので自家発電で辛うじて病院を維持していました。私たちは実際に行って状況把握したわけですが、気仙沼は5日間、電話が通じなかったので、他の地域からの状況把握は困難だっただろうと思います。

長く続けられること。サステイナブルであること

震災からの数日間で、仙台、石巻、気仙沼の病院を見て回って、「東北大学病院からの医師派遣だけでは到底、この状況に対応し続けることは無理だろう」と痛感しました。東北地方の太平洋沿岸地域にあった病院はほとんどが流されてしまって、今後、震災前の医療過疎とは比べものにならないほど医師が足りなくなることは目に見えていたからです。そこで、私は日本産科婦人科学会に掛け合って、3月末から1年間にわたって、全国の大学の産婦人科医に交代で東北に来てもらうようにしました。特に、石巻と気仙沼ではそのような医師派遣によって何とか医療体制が維持できました。

震災後、3月、4月、5月と被災地の病院はほとんど戦場のような状態が続きました。医師たちにも疲れが見えてきて、倒れてしまう人も出てきました。「これではまずい。臨時の医師派遣だけでは乗り切れない。チームを作って長期的なローテーションを組んでいかなければ」と思いました。当時、沿岸被災地の病院に関わっていた医療スタッフは皆、思っていたことだと思います。だからこそ、現在、東北メディカル・メガバンク事業として実施している「循環型医師支援システム（ToMMoクリニカル・フェロー制度）」の発想が出てきたのだと思いますね。

震災後、私たち東北の人間は、全国から本当に多くのご支援をいただきました。医療面においても、全国の多くの医療スタッフが東北に駆けつけてくださいました。今、もう一度、こころから感謝を申し上げたい……しかしながら、支援に駆けつけてくださった医師の皆さんもいつかは地元に戻られるはず。あの時期、私は「末永く被災地を見守る医療体制が絶対に必要だ」と考えていました。長く続けられること。サステイナブルであること。その考え方は東北メディカル・メガバンク事業の大きな下敷きになっています。

大切な、患者さんとの「対話」

現在、ToMMoが行っている「循環型医師支援システム」では、ToMMoクリニカル・フェローと呼ばれる若手医師が被災地に4ヶ月交代で駐在し、医療を行っています。医療支援というものは、何度も短期間で行くよりも長期間で行くほうが良いし、「その地に居着く」ほうがさらに良い。居着いて、患者さんとの「対話」を繰り返すことで分かることも多いんです。患者さんとの距離を近づけて気兼ねなく話せる関係になることはとても大切ですね。

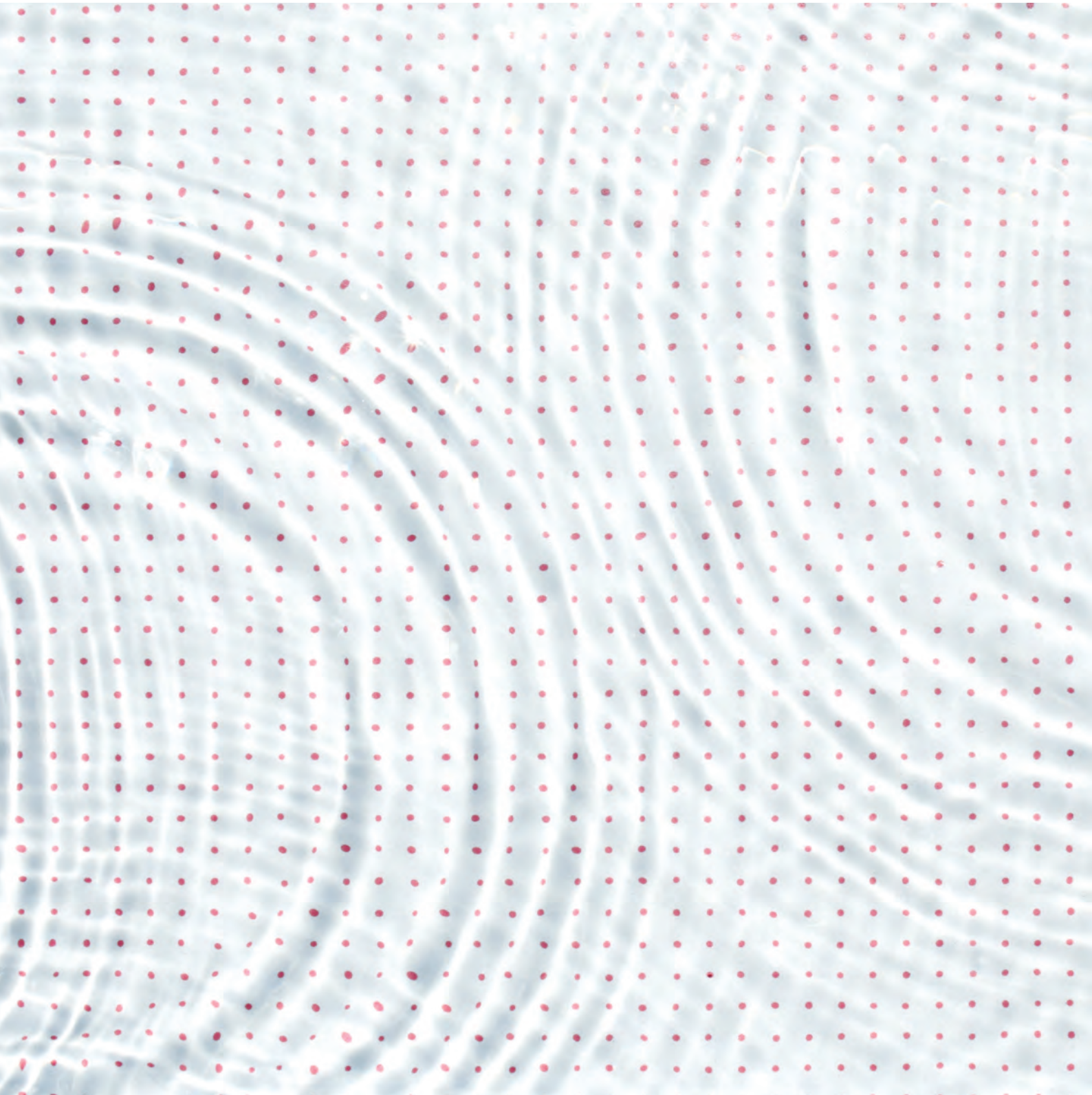
いろいろな患者さんとお話しさせていただいて、もっとも感じることは「人間、生き甲斐を持つことが大事だな」ということですね。生き甲斐があれば、肉体的精神的に辛い状況の時も前向きに生きていくことができるのではないでしょうか。患者さんが医師と「対話」することで少しでも生き甲斐を見つけていってくださるとうれしいです……東北メディカル・メガバンク事業のことも「自分の子どもや孫の未来を明るくするための活動だ」と考えていただいて、私たちと一緒にそういう明るい未来を創っていくことに生き甲斐を感じてくだされば、これほどうれしいことはありません。

私は「ToMMoが作り上げるバイオバンクは、震災復興のための『インフラ作り』である」と考えています。災害で壊れた橋や道路を作っていくのと同じように、50年先まで見据えて構築する社会資本だということ。私たちは大学人であり、医学を研究する者です。被災地の方々の健康状況を正確に記録し、地域に役立つ医学を創り出していくことこそが、「私たちがやるべき復興事業」なのだと強く思っています。

［2014年6月20日。東北大学東北メディカル・メガバンク棟・機構長室にて］

フレーズ

[phrase] vol.02
2014.10 Issue
Tohoku Medical Megabank Organization

東北メディカル・メガバンク機構 広報誌
発行/2014年10月31日
編集発行/東北大学 東北メディカル・メガバンク機構
〒980-8573 仙台市青葉区星陵町2-1
Tel. 022-717-8078
http://www.megabank.tohoku.ac.jp

TOHOKU
UNIVERSITY